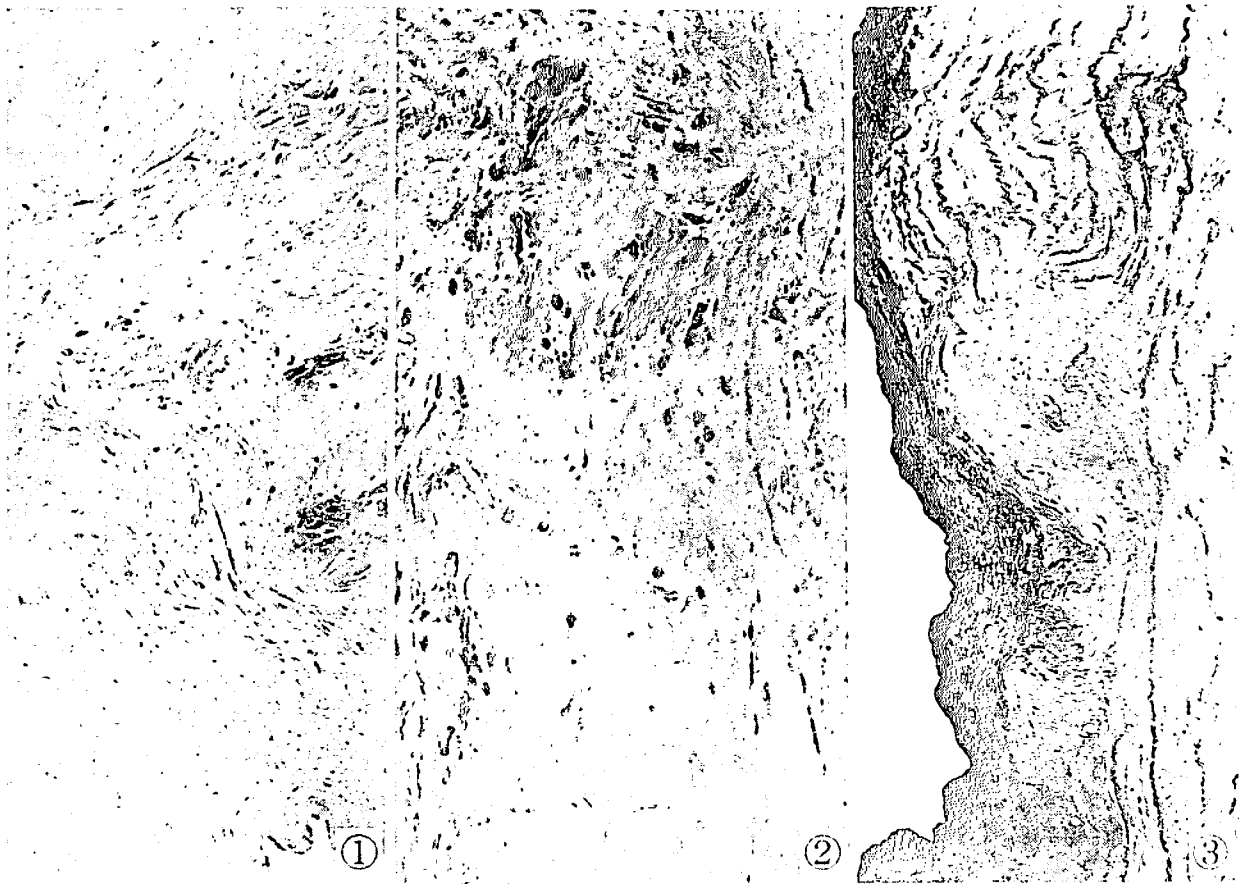


# 馬の頸動脈洞部の中膜変性

競走馬総合研究所馬事第三研究室出題 第17回獣医病理学研修会標本No.254



動物：馬（サラブレッド種），障害競走用，雄，3才11か月齢，北海道産，繁養地一千葉県，体重—440kg。

臨床的事項：剖検7か月前，軽度の便秘症に罹患した以外特記する既往症はなく，健康状態は良好であった。昭和45年3月障害調教中，突然後軀踏踏，転倒し，そのまま斃死した。臨床的には心臓麻痺（突然死）と診断された。

剖検所見（死後3時間半）：(1)肝，腎，脾など諸臓器の強いうっ血及び諸粘・漿膜の溢血。(2)脾臓及び胸腺(100g)の点状出血。(3)脳・髄膜の血管充盈及び延髄点状出血。(4)肺の充血・点状出血及び気腫。(5)心重量3.9kg 右心室弛緩，心房・室内には暗紫赤色流動性(凝固不良)血液相当量容れる。

組織学的所見：提出標本は右総頸動脈上部の内・外頸動脈及び後頸動脈分岐部の連続3か所の横断切片である。頸動脈洞の存在する内頸動脈及び後頸動脈の根部の管壁構造は弾性型で，頸動脈洞がない外頸動脈根部の管壁は筋型を示した。また，頸動脈洞が存在する総頸動脈上端部では弾性型及び筋型が混在していた。目立った病変は概して，筋型動脈壁の中膜により多く存在した。中膜の

内及び中層では膠原線維及び細網線維増殖を伴った弾性線維の巣状変性像が観察された（写真1：HE染色，×112；写真2：HE染色，×283）。該病巣の大きさは様々であったが，弾性線維は線維増巾，増数，断裂，塊状破片化，類石灰化及び部分的線維消失などを示した

（写真3：エラスチカワシギーソン染色，×79）。病巣内及びその周囲の筋線維は水腫性膨化及び空胞化並びに部分的消失を示し（写真1及び2），線維ないし水腫性変化がみられた弾性線維間組織は酸性ムコ多糖類の強陽性反応を示した。筋型動脈壁の中膜外層及び弾性型動脈壁の中膜では時折り，巣状の水腫性変化がみられた。これら病巣を有する動脈壁の外膜には壁栄養血管としての小さいし細小血管壁の水腫性膨化ないし粗性化が見いだされた。また，Heringの頸動脈洞神経とみなされた神経束は神経線維の部分的脱落及び水腫性変化が見いだされた。なお，提出標本と同質の変化は大動脈根部及び肺動脈左右分岐部の中膜でもみられた。

診断：馬の頸動脈洞部の中膜変性（競走馬にみられる突然死の原因は明らかにされていないが，頸動脈洞の中膜変性—機能不全を介する突然死がありうるのかもしいない）。